

令和5年度東京都広報コンクール 映像部門 総評

高橋委員

2023年度（令和5年度）の広報コンクールに応募された25の番組や動画を拝見したあとの感想です。

一般的には広報の「情報性」が強調されていて、「作品性」（企画性）にこだわった作品は少なくなった印象です。その情報性と作品性とそれを表現する「技術」とが三位一体でバランスの取れている番組・動画がやはりこの映像コンクールでの理想ということになります。

振り返ると2023年もやはり世界各地での戦争勃発、拡大、政治的な紛争、気象環境の悪化や経済的混乱が続きました。しかも、それを巡る情報合戦、フェイクニュース等のコミュニケーションの分断も蔓延し、私たちにとっての情報の大切さを教えるとともに、正確な情報を自らが選択をする必要性を否応なく迫ります。

国内では新型コロナの第5類分類をきっかけに、いろいろな観光誘致や伝統行事なども復活し、円安に端を発した消費者物価の高騰、少子化問題の加速化等の社会ニュースもありました。一方で、コロナ禍で人物に密着取材する企画は難しかったのも徐々に解消の方向に向かっています。

片や、今や主流になりつつあるYouTubeやTikTok等で配信された数多くの情報は、所謂インパクト最優先で、一瞬でどれだけ目を惹くかが勝負になります。Z世代に代表されるSNS世代の若者層はコンテンツを三倍速で視たりして情報を識別します。この時流に発信側が合わせると情報はますます先細りして、それを視る者を「情報」自らが選ぶような逆転現象が起きて、結果として世代間の分断につながっていく可能性があります。世代横断的に情報がくまなく届かなくては公共の広報は意味がありません。これからは分断を助長するのではなく、世代間の融合を目指して演出・制作していくべきだと思います。その上で、基本は情報をそのまま出すだけでは人は認知はするが感動しない、感動を伴わない情報は結局伝わらない、という定理を思い出すことだと思います。

さて今回の評価ですが、極端に振り切らずに「三位一体」になるべく近いバランスの番組・動画を高評価にさせていただきました。「保育ママ制度」を紹介した江戸川区の番組は少子化に歯止めのかからないこの時代に大きなヒントを与えてくれました。杉並区の音楽家の生き方を深掘りした番組、人物と技を魅せ切った荒川区のドキュメント番組もあ

りました。通常のインフォメーション番組のように見せかけてもチャレンジングな演出で一気に最後まで魅せてくれた調布市のような番組、短尺でもワンテーマで無理がなく最後までスムーズに視聴できるものもありました。評価の基準のテーマは、ある種の「感動」に視る者が至るかかどうかという点です。来年度もこの点だけは逃さずに存分にチャレンジしていただくことを期待しています。

中島委員

東京都広報コンクールにご応募いただきありがとうございました。

全作品を拝見し、まず驚いたのが自主制作の映像が多かったことです。映像の専門家が在籍している区市町村もあるのかもしれませんが、基本的には一般の職員の方が制作されたのだと思います。映像制作には多くのノウハウやスキルが必要ですので、もしかしたら色々と調べたり試行錯誤しながら、さらに他の業務とも並行して・・・だとすると、本当に頭が下がる思いです。内容も凝ったものが多く、予算をかけずとも、アイデアと頑張り次第で良いものが作れる。それは頭では分かってたつもりですが、様々な自主制作を見たことで、リアルに感じることができました。

作品の傾向について、作品が届く前は「アフターコロナ」や「関東大震災から100年」関連が多いのではと予想していたのですが、割合として高かったのはこども関連でした。今年度はこども基本法の施行やこども家庭庁の創設といった社会の流れがありましたので、そういった影響があるのかもしれませんが、たしかに日頃の広報活動を振り返ってみても、(映像に限らず)他の媒体や報道において、こどもに関するものが多かった年度だったように思います。

今回最優秀賞の江戸川区の映像は、まさにその流れといえます。一言でいうと、こどもへの愛情が凝縮された映像です。心が打たれるエピソードもあり、人との繋がりもあり、見たあとに何だか温かい気持ちになる素晴らしい内容でした。一席の杉並区の映像は、特に中高生に見てもらいたい内容で、新しい考えや学びを得るきっかけになると思いました。二席の荒川区は伝統工芸で、技術を伝承させる、後世に残すという意味で、大変貴重な映像と感じました。同じく二席の台東区は、区民をプロデューサーにするという企画が新鮮でした。奨励賞の品川区と調布市ふくめ力作ですので、この受賞が、より多くの方の目にふれるきっかけになると大変嬉しく思います。

受賞する／しないに関わらず、どの作品にも伝えたいことがあり、そのための知恵や工夫、担当者(制作者)の想いが込められていることを感じました。その意味では優劣つけがたく、どれも素晴らしい作品でした。また来年度も、多くのご応募をいただくと幸いです。